

フランスの映画理論家レイモン・ベルール (Raymond Bellour, 1939-) は、ヒッチコックを中心としたアメリカの古典的映画の精緻な分析によって 1970 年代にいわゆる「映画作品のテキスト分析」の代表的論者としての地位を確立するが、1980 年代からはそうしたテキスト分析を離れ、写真、映画、ビデオアート、インスタレーションの実験的な試みに注目し始める。ベルールは映画とビデオアートの関係、あるいは映画と写真の関係を主題として、写真、映画、ビデオの間の「イメージの通過 *passage de l'image*」の場を「諸イメージの間 *l'entre-images*」と呼び、その問題意識のもとで現在に至るまで三つの著作を出版している (1990, 1999, 2012)。本発表では、ベルールの「テキスト分析」から「諸イメージの間」第一巻 (*L'Entre-Images : Photo. Cinéma. Vidéo*, 1990) に至る映画理論の展開に焦点を当て、その理論的背景に注目しながら両者の試みを連続したものとして一つの展望のもとに再構成することを目的としている。

前半では、「テキスト分析」と「諸イメージの間」をつなぐ人物として、先行研究では扱われてこなかった、テキスト分析の論者からビデオアーティストへと転身したティエリー・キュンツェル (Thierry Kuntzel, 1948-2007) を取り上げ、ベルールのテキスト分析をキュンツェルの映画理論の問題系の中に位置付ける。注目したいのは、キュンツェルがテキスト分析において問題となる「映画的なもの *le filmique*」を「運動の側でも静止の側でもなく、その両者の間に *entre*」見ていることである。この主張には、「フォトグラム」をめぐるなされた二つの映画理論の議論、すなわちクリスチャン・メッツが『言語活動と映画』 (*Langage et cinéma*, 1971) において主張する「運動のコード」の議論とロラン・バルトが「第三の意味」において提起した運動とは別の次元にある「映画的なもの」という議論が包摂されている。ベルールはキュンツェルのこうした主張を引用し、編集台で動く映像である映画作品に対して「画面の停止 *l'arrêt sur image*」を行いながら進めていくテキスト分析を、「別のフィルム *l'autre film*」 (キュンツェル) を見出す作業として描写している。

後半では、上記の運動と静止の間にある「映画的なもの」の問題が「諸イメージの間」第一巻においてどのように展開されているかを考察する。まず取り上げるのは、キュンツェルのビデオアート、インスタレーションについて論じたベルールの論考である。ベルールはそれらの作品群をキュンツェルの映画理論の実践として捉え、「ビデオ」を「自分を思考すること *se penser*」という問題の中で考えていることを明らかにする。次に、映画と写真の関係を扱った第二セクションの議論を取り上げ、「画面の停止」をめぐるベルールが展開する運動と静止の問題を扱う。注目するのは、バルトの『明るい部屋』の議論への反論という形で提示された「思考する観客 *le spectateur pensif*」の問題とジル・ドゥルーズの『シネマ』に対するベルールの批判である。